

おうぼつ
国宝『王勃詩巻』続編の発見

京都大学が東京・品川の「京大東京オフィス」で開く連続講座「東京で学ぶ 京大の知」(朝日新聞社後援)のシリーズ6「中国学研究最前線」。第2回の2月8日は、唐の詩人、王勃(おう・ぼつ)の文字の発見がテーマだ。京都大学大学院人間・環境学研究所の道坂昭廣准教授が「国宝『王勃詩巻』続編の発見」と題して、若くして他界した“伝説”の詩人の人生から新発見の彼の文集の経緯などを語った。



丁寧に、ユーモアを交えて語った道坂昭廣准教授。唐の初期は、貴族から知識人へと政治や文学の主体が移り変わったダイナミックな時代だという

を指摘できました。役人になって順調に出世したのですが、当時はやっていた闘鶏で、自分の味方の鶏を励ます檄文を書いたことが皇帝の怒りに触れます。そして役所から追い出されました。しかしどうやらそれは表向きの理由であって、性格に問題があったようです」

その後河南省の役人になるが、ここでも周囲とうまく行かず、また事件にも巻き込まれて罷免される。このため、父も現在のベトナムにまで左遷されてしまう。王勃は、その父を訪ねる途中で海に落ちた。天才詩人の早すぎる死だった。

「ベトナムへ向かう途中の9月9日に、滕王閣(とうおうかく)というところで大宴会が開かれました。ここで王勃は宴会の序文と詩を書いた(秋日登洪府滕王閣餞別序)。読み下せば、『滕王の高閣江渚に臨み……』と始まる詩が、王勃の代表作です」

と道坂准教授。滕王閣は、現在の江西省南昌市の湖のほとりに立つ楼閣だ。王勃の作品で有名になった。これまでに29回も建て直されているという。会場のスクリーンには、天守閣のようにそびえ立つ滕王閣と、滕王閣にある王勃の像の写真が映された。王勃は凜々しく、賢そうな表情をしている。

「王勃は、初唐の時代には大変な人気でした」

●杜甫も絶賛した天才詩人

唐初期の詩人、王勃(650~676)は日本ではほとんど知られていない。道坂准教授が配ったA4用紙のレジュメの最初には、中国の古典『新唐書』(唐の正史)に収められた王勃伝が載っていた。漢文の横書きで10行しかない。とはいえ、王勃の数少ない伝記の一つだという。道坂准教授は、かいつまんで日本語に訳していった。

「王勃は賢かったようです。9歳で、権威ある『漢書』の注釈書の間違い

道坂准教授はそう話し、8世紀に詩人の杜甫も「黄河や揚子江の流れのように永遠に流れ続ける」と絶賛していたことを紹介した。しかし、王勃はやがて忘れられてしまう。全部で30巻に上る「王勃集」も、宋の時代(960~1279)には失われたらしい。

一方、1201年から1204年にかけて『文苑英華(ぶんえんえいが)』という全1000巻に上る詩文集が刊行された。王勃の作品も収められたが、この『文苑英華』も散逸してしまう。

「中国では、明の末期に出版が盛んになりました。そして『文苑英華』も1567年に復刻されました。ところが、この復刻版には間違いが多いのです。現在中国に残る王勃集は、この復刻版から再編集されたもので、オリジナルとは違います」

●日本に残る貴重な作品集

ではオリジナルはどこにあるのか？なんと日本である。オリジナルと言っても、正確には手書き写本の一部分が残されていたのである。いつ、誰が持ってきたのか？

「遣唐使によって日本へ持ち込まれたのでしょう。王勃集は、日本に残る写本では、仏典以外でいちばん古いものです」

現在日本には「王勃集」の一部が四つある。もっとも有名なのは、正倉院所蔵の巻物で「王勃詩序」と呼ばれるものだ。詩序とは、詩に付けた序文。41編の序文が収められているが、このうち20編は中国では失われている。この「王勃詩序」には、先に触れた代表作「秋日登洪府滕王閣餞別序」も含まれる。さらに「慶雲四年七月廿六日」という日付が入っている。西暦では707年。また、則天武后が政権を握っていた690年から705年にのみ使われた則天文字で書かれている。ここから、704年か707年に遣唐使が持ち帰ったと推定できる。王勃の死後40年程度しか経っていない。貴重なオリジナルと推定されるゆえんだ。

しかし、この「王勃詩序」も長い間、忘れられていた。脚光を浴びたのは明治に入ってから。日本に駐在していた中国(当時は清)の官僚が、印刷物を見ていて、そこにあった王勃の作品を「再発見」したという。

残りの三つの王勃集は、京都国立博物館所蔵の「王勃集巻28」、東京国立博物館所蔵の「王勃集巻29・巻30」、同じく東京国立博物館所蔵の「王勃集巻29の一部」だ。

この三つは、道坂准教授の推定では奈良の興福寺からあちこちへ散逸し、めぐりめぐって明治期や大正期に日本の金持ちの収集家に渡り、やがて博物館に収められた。東洋史学者で京大教授だった内藤湖南らによって、王勃集の写本であることを確認されたものだ。

収集家のひとり、赤星鐵馬(あかぼし・てつま)について道坂准教授は「気に入ったものがあると、その家の蔵ごと買っていたそうです。最初にブラックバスを輸入した人としても知られています」と紹介して、会場の笑いを誘った。



専門的なテーマだったが、聴衆は熱心に耳を傾けていた。日本に中国の貴重な文献が残っていることに感心している様子だった

●100年ぶりの発見は「紙」から

日本には第5の王勃集の一部があるのではないかと、それが今回の講演の核心だ。

その可能性が高いのは、「伝橘逸勢筆詩序切(でん・たちばな・はやなり・ひつ・しじょぎれ)」である。これは、静岡県熱海市のMOA美術館が所蔵している国宝「翰墨城(かんぼくじょう)」の中に入っている、漢文でわずか46文字、行数にして3行の古筆切(こひつぎれ)

だ。「泉不廻悠々蒼天此何人哉……」と楷書で書かれている。道坂准教授はこれを「泉は廻らず。悠々たる蒼天、此れ何人かな……」と読み、墓誌の銘文の一部ではないかと推測している。

古筆切とは、古人の美しい文字が書かれた巻物などを短冊のように切ったもの。江戸時代、古筆切を台紙に貼り、それを集めて冊子をつくり、鑑賞することが流行した。「翰墨城」もそのひとつで、300以上の古筆切が集められている。

「伝橘逸勢筆詩序切」を書いたと伝えられる橘逸勢は、平安時代初期の書家。嵯峨天皇、空海とともに日本三筆のひとりであり、遣唐使でもあった。なぜこの古筆切が「王勃集」なのか。それを解くカギは紙にある。

昔は、紙の裏側を使うのがあたりまえだった。京都国立博物館所蔵の「王勃集巻28」の裏には、「大乘戒作法」という仏典が書かれていた。そして「伝橘逸勢筆詩序切」の裏の文字も、綿密に観察すると「大乘戒作法」だと読み取れるのだ。実は京都国立博物館所蔵の「王勃集巻28」は一部が切り取られて欠けている。そこに「伝橘逸勢筆詩序切」をはめ込むと、内容がピッタリとはまる。字体も似ている。

この3行46文字が、本当に橘逸勢の文字なのかはわからない。だが、その中身は王勃の作品の一部なのだ。道坂准教授の粘り強い観察の成果である。

「ほぼ100年ぶりに王勃の文字が発見されたと言っていいと思います。ただ、内藤湖南先生らは大量の文字を発見しましたが、学問の衰退でしょうか、私はわずか3行です」。道坂准教授は、笑いながら先人に敬意を表した。

(※原稿及びクレジット未記載の写真は朝日新聞社提供)